# 「往来物」とは何か
## ——その概念形成についての一考察

マルクス・リュッターマン

### 序

『日本国語大辞典』の「往来物」という項目では、「往来」は往来消息の意であるといい、「往来物」を初等教育の教科書と説明する。副読本の総称であり、模範文例集から社会常識、実用知識なども盛り込んだ文例集へと発展したという。小論では、上記の性質による定義が明治時代の学制教科書の登場によって初めて成立し、「往来」の原意から完全に遊離し、しかもその原意に沿った書物を除外すらしてきた過程を浮き彫りにしながら、ジャンル概念の整理をめぐって考察してまいりたい。

### 1　書儀・立成・月儀・往来

『礼記』（c. *Liji*）の「内則」によれば、「學書計」や「請肄簡諒」が童子の教育に定着していたことがらである。おなじく「言語之美」（c. *yanyu zhi mei*）は礼の一齣で、言ったり語たり、贈答、問答を一般的に「禮尚往来」（c. *li shang wanglai*）といい、つまり礼においては往来が重視されるという。『周礼』（c. *Zhouli*）によっても、言語は礼学の文脈で「教」（c. *jiao*）の対象とされる。この礼儀の具体的な規範を表す最も顕著なものとしては、数多く宋・唐・隋時代の歴史書（『隋書』c. *Suishu*、『旧唐書』c. *Jiu Tangshu*、『新唐書』c. *Xin Tangshu*）で紹介され、唐時代からも少なからず保存された「書儀」（c. *shuyi*）や「月儀」（c. *yueyi*）、「立成」（c. *licheng*）などがとりあげられる。書儀とは書簡などのための模範文章であり、ものによって解説もついている。書儀類が奈良時代から夥しく渡海して公家に親しまれた形跡は既往の研究でも明らかにされており、ここでは詳しい検討は論外におきたい。

書儀が参照された事実は、法の解釈や文献目録に傍証される[1]。ここで問題となるのは

1　日本で保存されている例は少数だが、正倉院で保管されてきた『杜家立成雑書要略』*Dujia licheng zashu yaolüe* 1994（『杜家立成雑書要略——注釈と研究』に収）及び八王寺につたわる抜粋（『高昌吉凶書儀』*Gaochang jixiong shuyi*［『敦煌表状箋啓書儀輯校』*Dunhuang biao zhuang jian qi shuyi jijiao* 1997、461 頁に掲載］）がある。また、立成の一部写しの木簡が宮城県の市川橋（Ichikawabashi）で出土している。『古代日本文字のある風景——金印から正倉院文書まで』2002、54 頁、展示品 75 号（国立歴史民俗博物館にて保管）参照。書儀にふれる「穴」という解説書が『令集解』*Ryō no shūge* 1966

むしろ、書儀の形態に酷似している日本に伝来された「往来」と名乗る書物である。書儀との名称では問題ないのに、書儀の類の文献は日本語としては往来という。円珍（814–91）のもたらした書物に『福州往来集』（c. *Fuzhou wanglaiji*）、『温州台州往来集』（c. *Wenzhou Taizhou wanglaiji*）が録され、内容は明解ではなく、紀行かもしれないが、『建老宿手書集』（c. *Jian Laoxiu shoushuji*）も列せられた事実から、書翰集を指す可能性もある。くわしいことは解らない。[2]

## 2　平安時代以降の「往来」

日本で編集された書簡文例集には、書儀や月儀に似たものはあるものの、書名にはそれらの名称は見当たらない。「往来」「消息」というのである。平安時代末期に成立し、14世紀から著名な『雲州消息』や『雲州往来』に、16世紀からは『明衡往来』とよばれる公家用の書翰例文集にみえるが、これらはおそらく中国の書名に沿った名称であろう。[3] 12世紀の『和泉往来』の後記（文治2年の写し）にもその名称がみえ、[4] 学名の『高山寺本古往来』（平安末期）もまた、当寺に保管されている目録にある「往来」にあたると推定されていることに基づいている。書翰体の例文集の使用法は必ずしも明らかではないが、聞き取りの練習の形跡は少なからず取り上げられる。[5]

しかし、聞き取りなど、識字に備えた教材としてのみならず、書簡文体を採用した書物の編集には他の目的もあったことは無視されてはいけない。周知のように、吉田兼好をはじめ、習字などの稽古の場での「型」や「作法」を強調する声が多い。書の練習は文字通り「修身」を意味している。中世学問では専ら儒教的礼学が仏教の真言思想や現世安穏後生善處や功徳などと折衷・習合的に絡み合う事実が『消息往来』や『新撰遊覧往来』『東山往来』『十二月消息』『手習覧往来』『垂髪往来』など、「往来」とよばれる11～15世紀の史料に端的に反影している。形式的に「互飛短札」しながら、師匠と子弟と、檀那と師僧とが「問答」をし、片方が「不審事」を「問」う、他方が「答」「報」ず

（国史大系、第24巻）、791頁で引用される。山田英雄 Yamada Hideo 1968、34頁及び丸山 Maruyama 1996、152頁（脚注22）参照。『日本国見在書目録』*Nihonkoku genzaisho mokuroku* 1959（続群書類従、第30巻に収）、38頁、41頁、43–44頁にもその類の書名が収録。また、小松 Komatsu 1976、12頁も参照。

2　円珍の『開元寺求得経疏記等目録』*Kaigenji gutoku kyōshoki tō mokuroku*（平安遺文、第9巻）、4475–77号、3388–409頁、3394頁。山田英雄 Yamada Hideo 1968、31頁及び丸山 Maruyama 1996、132頁参照。

3　例えば三保忠夫 Miho Tadao／三保サト子 Miho Satoko 1997の研究があるが、その他も枚挙にいとまなし。Scharschmidt 1917／1918（独訳）も参照。

4　『和泉往来』*Izumi ōrai* 1981a（貴重古典籍叢書、第3巻）；『和泉往来』1981b（京都大学国語国文資料叢書、第28巻）；『和泉往来』1967（日本教科書大系、往来編、第2巻）、220–34頁（ここでは実はワセンオーライと読む、カセンという読みも可）。遠藤嘉基 Endō Yoshimoto（1960–63、1983）や植垣節也 Uegaki Setsuya（1962ab、1965）、山田忠雄 Yamada Tadao（1981）などの研究がある。

5　本文と研究は、高山寺典籍文書綜合調査団 Kōzanji Tenseki Monjo Sōgō Chōsadan 編 1972に収められている。Rüttermann 2003/2004（独訳）も参照。

るなどとし、その書物の目指すところは「拾要（ようをひろい）」て「寄私家之小生不敢爲大人所要（しけのしょうせいにきす。あえておとなのしょうたらず）」といい（『東山往来』）[6]、または「拾古來上綱消息備當時廳務要樞（こらいのじょうこうのしょうそくをひろいて、とうじちょうむのようすうにととのう）」といい、「口授幼學之少生爲辨門跡之故實也（ようがくのしょうせいにさずけて〔くじゅして〕、もんぜきのこじつをわきまえんがためなり）」という（『十二月消息』、1397～1408頃）[7]。即ち幼學の内容には廳務が主旨であった問答も存在していた。「少生」はつまりほかでは「爲後代之少童等（こうだいのしょうどうらがために）」とあるように「少童」など、または「少髡（しょうこん）」（『手習覺往来』）ともよばれ、師同士が「奉問答（といにこたえたてまつる）」形をとりながら、いわゆる少童の「出世」につとめた[8]。

ここで出世というのは、「穴」（落ちこぼれ）の反対語であることに注目したい。落ちこぼれはほかならぬ「農桑」であった（「出世之習字者限命世間之農桑入穴云々（しゅっせのしゅうじはいのちのかぎり、せけんののうそうはあなにいるうんぬん）」）。地元の家々の子息らが寺入りし、俗書を学んだ様子が説話文学にも[9]、海外から列島に踏み込んだ人々の記録にも[10]つたわっている。要するに、少童には豪農身分、若しくは小百姓出身の男子が含まれていたといえる。寺院には公家出身の者もあれば、豪族（武士）出身も多く、後者の「初心之児童（しょしんのじどう）」も登山して、山寺が「戦場」に、「御手習之立柄（おてならいのたちがら）」が「合戦之出立（かっせんのいでたち）」に、「硯墨・筆」が「武具・太刀」になぞらえられ（『手習往来』）[11]、「卓机（たっき）」は「城墎（じょうかく）」になぞらえられて、「手習學文」の指導をうけた。また「師匠」は「大将軍」の姿で立ち現れている。城の卓には敵が陣取りを心がけ、「大勢楯（おおぜいたて）［＝立］籠（こもり）」をしようとするに対して、恰も生徒らが「忍入（しのびいり）［……］大敵討窺事（たいてきをうちうかがうこと）」のように習字、即ち「未存知文字一々書（ぞんぜざるもじいちいちかき）

6 『東山往来』 *Tōzan ōrai* 1959（続群書類従、第13巻［下］）、1071–126頁；『東山往来』1968（日本教科書大系、往来編、第1巻）、367–422頁。

7 『十二月消息』*Jūnigetsu shōsoku* 1967（日本教科書大系、往来編、第2巻）、333頁。

8 『手習覺往来』 *Tenaraigaku ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第2巻）、259頁。世尊寺行能 Sesonji Yukiyoshi などの人物が登場するので13世紀の書物と思われる。

9 因に説話集の『長谷寺霊験記』*Hasedera reigenki*（1435年）の最後の逸話によれば、高倉天皇（1168–80在位）の頃には摂津国住吉村（Sumiyoshi mura）の藤五（Tōgo）という者が「一人ノ男子ヲ持チ幼少ノ程ニ俗書ナンド讀マセントテ」（*hitori no danshi o mochi, yōshō no hodo ni zokusho nando yomasen tote*）親によって和泉国の巻尾寺（Makiodera）におくられて、歳十六か十七になった時に漁業の「跡ヲ續ガセント云ケレ共」（*ato o tsugasen to iikeredomo*）、息子が「宿善ニヤ」（*shukuzen ni ya*）、村の「在家」（*zaike*）に帰る気はなく、天台宗の「止観」（*shikan*）、即ち瞑想に専念し、僧名を信誉（Shin'yo）として、「修学」（*shūgaku*）を聖忍房（Shōninbō）で続けたという話がある。『長谷寺霊験記』*Hasedera reigenki* 1964（続群書類従、第27巻［下］）、274頁以下。

10 Maffeus 1586、p. 54（Johannes Georg Goetz の独訳）；Caspar Belga（?–?）および Cosmus Turrianus（Cosmes de Torres, 1510–70）の1548年に Goa で書き留めた記録によれば（書簡3号）、日本人パウロ Paulus（?–?）が故郷の教育について次のように語った。即ち「殿ばらは［……］セガレ達は七八歳になれば、十七八歳まで寺院にいれておく。それは読み書きや、また聖なるものも覚え、家の輩を養い、普遍の利益を治める各能力を身につけるためである」という。ザビエル Xavier も（7号、pp. 125ff、140）パウロとの出会いを報告し、さらに教育について「みやこの高等学校、五箇所のコレジオ〈"Coia"（高野山 Kōyasan）、"Negru"（根来寺 Negoroji）など〉」をならべて、小さい学校は200ほどあったという。メンドサ Ferdinand Mendoza（Fernando Mendez Pinto, ?–1583か）の書簡（Malaca にて、1554年12月5日）はザビエル Xavier からの伝言として坂東のアカデミ（"Academia"）は「パリよりも偉大である」と（21号、p. 523）。この書簡集は15号（1552年、p. 346）で僧侶の夥しい人数を指摘し、老松堂（1376–1446）や申叔舟（1417–75）の紀行に共通している。

11 『手習往来』 *Tenarai ōrai* 1970（日本教科書大系、往来編、第4巻）、576頁以下。奥書に天文17年（1542）とあるが、もとの撰作年代は不明。

浮習覺事」に専念。絶えず（「無隙」）「向手本」って、書き浮べながら習い覺えることが修学方法の根底であった。それがまた「高名」或は「面目」となり、若しくは「知行」のような権力支配の行政を行う資格とも看做された。逆に、師匠におとなしく耳を傾けずして（幼稚之時者不隨二師ノ仰）、寺を出る（寺ヨリ逃下）輩は頼りにならない「不用」または「疎学」の者、「不學」または「未練」な者で、無学が故に「我心」の強きままの人々を意味している。修学は「稽古」（先例を顧みること）ともいって、儒学並みの概念として定着して「文武二道」の基礎となった。一方、寺院の門閥や寺家流や公家流や武家流などの閉鎖性が高く、教材も「極秘」として「請必禁他見爾」という風に外部には閉ざされて伝承された事実はよく知られている（『釈氏往来』[12]）。

ところが、近世（17 世紀）に入って、多くの伝来材料が公刊される。流派をまたぐ木版本の序に、中世から伝わる学問の精神が庶民に宛てて普及させられた。

たとえてみれば、『百也詞』や『百也往来』が出版されると、流派による拘束は緩められ、進藤貞栄（?–?）による後書（跋）が加えられた[13]。それによれば、「學斯道則庶民之子成君子不學貴介之子成庶人」と論ぜられるほど、出世思想が展開した。庶民が君子へ昇格し、「初学之士」となるという比喩が正に近世らしく展開し、「書札之要法」は「扶桑」［中国では伝説の東・朝の木であり、日本をさすようになった］の「禮儀」の一駒として説かれ、無知（不佞）の人民は「初学」を求めて手紙の書き方を勉強し、書道を習いたい、つまり「直欲知消息筆術之法」という。それを達成して、書法の神髄を覚えた人は雀のように跳ねて喜んだり（精見斯書實得筆術之蘊奥勸抃雀躍）、魚のように川登したり（如渇魚走泉）、龍のように太陽の彼方へ天上したりする（恰似蟄龍向陽）。

因に、例文集の中にも「入学」やいわゆる「寺入」を祝う手紙の文章がのっているので、手習学問と往来との密接な関係があらわになる。たとえば女子のための『女用智恵鑑宝織』（明和 6〔1769〕年）[14]では、「御料人」の「寺入」は「手習師匠をとる事」と説明され、或いは家庭教師により或いは寺子屋で初学することを意味していることが分る。

往来と名付けられるものには、『貞徳文集』『知古往来』のような書翰の例文集以外に、『手習覺往来』のような手習用のもの、『累語文章往来』のような語彙集も含まれていて、しかも詞・手習・書翰教育や参照と縁の薄い、若しくは縁のない『東山往来』『賢才往来』『庭訓往来』『遊学往来』も形式的には書翰体の書き出しで始まるか、書止めでおわるのである。江戸時代の『勇烈新田往来』[15]もまた上記で触れた中世の多くの往来のように「童蒙」のための「手習状」として「手跡稽古」にあてられるべく「武士の戦場*爾*向ふが*古*〃と」き道徳的教訓書にほかならない。習字と書翰文体とが転用された、身体と意識におよぶ礼法の指導教法にすぎなかった。そして事実、14 世紀の書道では、『麒麟抄』[16]によれ

12 『釈氏往来』*Shakushi ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、216 頁。
13 『百也往来』*Hyakuya ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、451 頁。
14 『女用智恵鑑宝織』*Joyō chie kagami takaraori* 1994（往来物大系、第 94 巻）。
15 『勇烈新田往来』*Yūretsu Nitta ōrai* 1996（稀覯往来物集成、第 7 巻）、77 頁。
16 『麒麟抄』*Kirinshō* 1966（続群書類従、第 31 巻［下］）、186 頁。

ば「往来書」ではまんべんなく字をある程度崩し、人名などの場合も書体・字体をある程度にとどまって崩すことに対して、「消息書」では相手によって礼儀次第にその墨の濃淡を調整することでもって対応しているので、一つには「往来」は手習用の書物一般若しくは書翰文体の手習書を指す傾向にあったようである。しかし、「往来物」の概念が初めて17世紀の史料に例証できる。『和漢書籍目録』には「往来物并手本」の項目に『麒麟書』『教文章』『勧学文章』が並べてある。[17]『麒麟書』は手本と思われる。だとすれば、ひろく「文章」と名付けられるものは「往来物」として総括されていた。手習と文章（書翰文例）との二通りの要素によって、ジャンル概念の形成が進んでいたようである。

さて、大概上記の如く往来は少なくとも二状の文通を意味するが、『宇津保物語』[18]では仲忠が藤壷宛て「手づからラ往来月日書きて［……］御名し給へり」と手紙をしたためているので、書翰一通も抽象的に往ったり来たりするものとしてとらえられていたらしい。この観点から分析してみるに、『尺素往来』[19]の主旨は一通からなるものの、正確には問い合わせの単文もあるので二通からなり、14世紀の『新札往来』[20]は初めての一通形態であることが判明する。一通の形をとるテキストは『手習往来』『雑筆往来』『百也往来』[21]などのように、殆ど「也」に終わる文章からなり、候文からはなれかけて、ひいては書止めを抜きにして、書翰体から遊離してしまった。書翰体の書き出しではじまるものもあるが、多くは手紙と違って論文や教訓のように「夫」や「凡」ではじまり、教訓や詞集と化している。例えば、1795（寛政7）年刊の『萬物名數往来』[22]は往来とは名乗るが、手習の材料であったかもしれないとはいえ、書翰の文体や往来の語源を思い起こせるような要素が一切認められず、書き止めすらない。

## 3 『往来物分類目録』及び書簡文体以外の「往来物」の近代的概念

以上、書簡文体に注目しながら、手紙そのものをはじめ、言葉の教育や書道に採用された教材及びその理論を見てきた。往答文の文例集は、『節用集』という百科的公刊物にも収載され、より広い参考使用の文脈に包括されている系統にも寄与している。しかし、もともとの一通の書簡文体の書簡的特質が剥脱される過程の挙げ句、最終的には教訓の文章と化してしまうものも現れた。これは書簡文体の歴史的変遷の副産物である。しかし、近

17 田淵 Tabuchi 1997、85頁。母利 Mori 1991、24頁。

18 『宇津保物語』*Utsuho monogatari* 1959、第3巻（日本古典文学大系、第12巻）、202頁（「国譲」“Kuniyuzuri” 中 chū）。

19 『尺素往来』*Sekiso ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第2巻）、483–514頁。

20 『新札往来』*Shinsatsu ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第2巻）、462–82頁。

21 『雑筆往来』*Zappitsu ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第2巻）、423–40頁。蔵野 Kurano 1981／1985参照。早くも『倭漢朗詠集』*Wakan rōeishū* にも収まり、活字になった（「雑筆抄」“Zappitsushō”、『慶長五年耶蘇会板倭漢朗詠集』*Keichō gonen Yasokai han Wakan rōeishū* 1964、47–56頁）。『百也往来』*Hyakuya ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第2巻、441–51頁）はこの体裁に近い。

22 『萬物名數往来』*Manbutsu meisū ōrai* 1978（日本教科書大系、往来編、第6巻）、108–14頁。

代に移って、名称に往来とはなくても、『筆林用文章指南車』など、初学を唱える「用文章」や、「節用」「當用」「筆海」と名乗る多くの書が往来物に加えられるようになった。一方、全く書翰文体に由来せず、関連性のない『今川状』や『実語教』や『童子教』や『伊呂波歌』まで、現在において往来物に分類されている（『日本教科書大系』〔往来編〕の第5巻、『往来物大系』の第34巻など参照）。これらの教訓書は明らかに、読書か書き写しでもって道徳・文字・言葉を学ぶ刊行物であるが、問答式と書翰文体という形をとらない。『今川状』ももともとはいわば遺言の家訓で、条々を一つ書きで纏めたものにすぎない。その採用の理由はまぎれもなく習字・読書および修身にあるとはいえ、それらを往来物として位置付けられるかは新たな検討に値する。

岡村金太郎（1867–1924）と啓蒙会が公刊した『往来物分類目録』（1922年～）[23]では、史上初めて近代前及び明治維新後（教育勅語発布の明治23年まで）の単語編小学読本の「教科書」が「往来物」と定義されている。さらに「寺子教育ノ教科書ト同一ノ意味トナリタル」事情がすでに定着していたかのように述べているので、読本と説明文に比重をうつした科目教法（教科）の本質と異なるそれ以前の寺子屋手習本若しくは兼体の読書本を総括した狙いは瞭然である。書翰体裁に限らず「広義ノモノ」の幅広い定義となる。岡村氏自身が「孝経……等漢文ノモノヽ如キハ之ヲ往来物トスルヲ不当トスルノ嫌アレドモ」といい、『重宝記』などの出版物もいれたことも「広義ニ過ギタルノ嫌アリ」という問題意識はあった。岡村氏によれば、それは「純寺子用教科材料ト限定スル能ハザレバナリ故」のことである。しかし、教訓書などは未刊・公刊問わず多く伝来し、純寺子用教科材料と限定しえないものは夥しい。とりわけ中世の写しや伝授資料に留まったものを往来物に入れなければ、いわゆる広義の教材の全体像がいまだ充分に浮かび上がらない。岡村氏のように、『今川状』『御成敗式目』の手習本をイコール往来物とする所見が継承され、たとえば申し状の手書きの写本として伝承された『白岩目安』なども豪農社会では独特な伝承資料が教育材料と化して、「御手習早々御精被入御習可被成候」というような師匠らしい加筆が認められる故、結果的に学界ですこしずつ往来物として理解されてきている。[24]手習本や教訓書という捉え方も考えられるが、問題は往来物という名称にある。なぜ手習本や教訓書が往来物として包括されたか。

## 4　往来物と位置づけられない文例集、参考書や中国からの輸入書

書簡文の形をとらない教訓書を幅広く往来物に加える既往研究の習わしがあるが、逆に書簡文例集には往来物としての共通認識のないものも存在している。『往来物分類目録』には、例えば『書札調寶記』（『書札調法記』をさす）が収録されている（20頁）。岡村氏の解説文には「往来物ニアラズト雖モ之ニ準ズ」とあるが、この準拠は何かが明記されてい

23　『往来物分類目録』1925;(1) 1922。
24　八鍬 Yakuwa 1987、30頁。

ない。『書札調法記』をみるに「凡例」[25]でも説くごとく、「高下のしなをしるして」見分けやすい体裁になっているし、上中下の順で調え、しかも「目録」（＝目次）では「下に丁付を可きその葉の表にあるをヲと志るし其葉の裏にあるをウと志るして春ミや可に見や春可らしむ」、つまり早引きをしやすくしたと説明しているように、編者は教育現場よりは参考書かその指南の準備を想定しているようである。このように参照用の色彩も濃く、しかも教師、家長、女房はつかったのか、どれほど教育用のものであったか、機能論の上ではまだ充分解明されてはいない。もう一つの例を見よう。たとえば『文章指南調法記』には「入学文章」[26]の例文も掲載されているが、「学書翰」の文章[27]とあわせて見れば、師匠が男子のための御稽古に適切で必要な方法を教えている論調がみとめられる。中国の『翰墨全書』（c. *Hanmo quanshu*）[28]や『尺牘双魚』（c. *Chidu shuangyu*）[29]は「重宝之責道具」として、「初心之間者少々佶屈綾」もあると、励みはほめるが、その使用をむしろ断っている。従ってこの文章は、教える側の虎の巻の機能を暗示するのではないかと思われる。だとすれば、この性質をもつ書の要点は教科書よりはむしろ参考書にある。そのためか、躊躇して取り入れた岡村と違って、現在は、書翰の体裁、往来文を編した形ながらも、『書札調法記』『文章指南調法記』などは一般的には（石川謙及び石川松太郎の研究をはじめ）往来物（『往来物大系』や『教科書大系』の往来編）として把握されていない。

且つ、中国から輸入された『尺牘雙魚』なども往来文の構成であるものの、岡村氏の目録をみても『往来物大系』をみても、往来物の枠外となる。ひいては結果的に、法典の手習本や道徳の漢文教訓など、書簡体と消息の読み書きに一切縁のない材料が編入される一方、まぎれもなく往来体裁となっている書物が教科書と看做しがたいことを理由に、往来物の概念に包含されなくなってしまう。私の危惧しているところは正に、概念の原意からのこのような遊離にある。

## 結　論

以上で見てきた経緯では、いわゆる往来物は手習の史料だけでも総括が至って難くして、教訓書の方も万遍なく含意される概念としては成り難い。仍て、純粋に語意の元にもどって、手習の機能論には配慮をはらっても、せめて往来の文体、つまりは書翰文体の教材に限定した往来物概念を提唱したい。教科書といえば教科書の概念とすれば充分で、寺子屋の教材は手習本・読本とすれば明快であろう。それを広義の往来物概念とするのは困惑を

25 『書札調法記』*Shosatsu chōhōki* 1976（近世文学資料類従、参考文献編、第5巻）、5頁以下。

26 『文章指南調法記』*Bunshō shinan chōhōki* 2005（重宝記資料集成、第7巻、往来物2）、165頁以下（巻四）。

27 『文章指南調法記』2005、224頁以下（巻五）。

28 『新編事文類聚翰墨全書』*Xinbian shiwen leiju hanmo quanshu* を指すと思われる。『新編事文類聚翰墨全書』*Xinbian shiwen leiju hanmo quanshu* 1995ab（四庫全書存目叢書、子部）、第169巻、第170巻、1–392頁参照。

29 『尺牘雙魚』/『尺牘双魚』*Sekitoku sōgyo*、c. *Chidu shuangyu* 1652。

招きかねない。誤解を回避する狭義の往来物概念への考察の転換が必要であると思う。もし、岡村氏の定義以前にもどる再編成が可能ならば、『和漢書籍目録』にある「文章」など、書翰文体を説いたり、その文体を梃子にしたりする文章集とともに、書翰文体を採用する総ての参考書（『重宝記』『調法記』『尺牘雙魚』など）をも含む範囲が検討されるべきであろう。ひるがえって、書札の文体を載せずして、書礼に関して説く規定や条目、詞集などのみからなるもの（言わば書礼教化史料）も、書翰体に関係のない教訓書及び書翰体から遊離してしまった近世後期の「往来」と名乗るものも、狭義の往来物概念の範囲から排除することも有益であると思われる。

## 文献

### 1　研究や史料大系


遠藤嘉基 Endō Yoshimoto 1960「高野山西南院蔵『和泉往来』について」『語文研究』10（5月）、1–10 頁。

遠藤嘉基 1961a「高野山西南院蔵『和泉往来』」；1961b「高野山西南院蔵『和泉往来』補正」；1961c「高野山西南院蔵『和泉往来』あれこれ」；1962a「〈和泉往来〉の書写について」；1962b「『和泉往来』攷」；1963「『和泉往来』攷（承前）」は各々『訓点語と訓点資料』（17 号、1–33 頁；18 号、1–16 頁；19 号、64–71 頁；23 号、1–17 頁；24 号、44–53 頁；27 号、1–11 頁）に収められている。

遠藤嘉基 1983「『和泉往来』攷——漢字と訓との関係をめぐって」同志社国語学研究会編『同志社国語学論集』大阪：泉書院、1–14 頁。

小松茂美 Komatsu Shigemi 1976『手紙の歴史』岩波書店。

蔵野嗣久 Kurano Tsuguhisa 1981「真如蔵旧蔵本雑筆集について」『土井先生頌寿記念論文集「国語史への道」』第 2 巻、三省堂、8–26 頁。

蔵野嗣久 1985「東京大学所蔵の室町時代往来物について」『安田女子大学紀要』14 号、1–10 頁。

国立歴史民族博物館 Kokuritsu Rekishi Minzoku Hakubutsukan 編 2002『古代日本　文字のある風景——金印から正倉院文書まで』*Kodai Nihon — moji no aru fūkei. Kin'in kara Shōsōin monjo made*、東京：朝日新聞社。

高山寺典籍文書綜合調査団 Kōzanji Tenseki Monjo Sōgō Chōsadan 編 1972『高山寺本古往来・表白集』（高山寺資料叢書、第 2 巻）、東京大学出版会。

Maffeius, Johannes Petrus［Maffei, Giovanni Pietro］1588 *Historiarvm Indicarvm Libri XVI. Selectarvm item ex India Epistolarvm eodem interprete Libri IV*［*qvator*］. Firenze: Philippus Ivunctus［1589, Venezia: Damianus Zenarius］.

Maffeius, Johannes Petrus［Maffei, Giovanni Pietro, Johannes Georg Goetz 訳］1586 *Kurtze Verzeichnuß Und historische Beschreibung deren dingen so von der Societet IESV in Orient von dem Jar nach Christi Geburt 1542 biß auff das 1568.*［…］. Ingolstadt: Dauid Sartorium.

丸山裕美子 Maruyama Yumiko 1996「書儀の受容について——正倉院文書にみる「書儀の世界」」『正倉院文書研究』4、125–55 頁。

三保サト子 Miho Satoko 1979「『高山寺本古往来』の“商業往来集”的性格」『人文科学』29

号（国語学、国文学、中国語学編）［福井大学教育学部紀要、第一部］、51–60 頁。
三保サト子 1983a「雲州往来注釈断章⑴」『人文科学』31 号、1–9 頁；1983b「同⑵」32 号、1–13 頁；1984「同⑶」33 号、19–31 頁；1985「同⑷」34 号、1–17 頁；1986「同⑸」35 号、19–48 頁。
三保忠夫 Miho Tadao 1993a「近世の往来物・書札礼における助数詞について」『島根大学教育学部紀要』（人文・社会科学）27⑴号、35–71 頁。
三保忠夫 1993b「近世の往来物・書札礼における助数詞の考察――『女文通宝袋』について」『國文学攷』［広島大学］138 号、16–31 頁。
三保忠夫 Miho Tadao／三保サト子 Miho Satoko 1997『雲州往来享禄本　研究と総索引』（和泉書院索引叢書、第 41 巻）、大阪：泉書院。
三保忠夫 Miho Tadao／福井千奈美 Fukui Chinami／三保サト子 Miho Satoko 1994「庭訓往来刊本についての基礎的研究」『島根大学教育学部紀要』（人文・社会科学）28 号、27–69 頁；1995「同（補遺 1）」29 号、1–7 頁。
母利司朗 Mori Shirō 1991「『用文章』古版考――近世初期往来物拾遺㈠」『岐阜大学国語国文学』20 号、24–39 頁。
『日本教科書大系』*Nihon kyōkasho taikei* 1961–74（往来編、石川松太郎 Ishikawa Matsutarō 編）、講談社。
『日本教科書大系』*Nihon kyōkasho taikei* 1961–67（近代編、海後宗臣 Kaigo Takaomi 編）、講談社。
小椋秀樹 Ogura Hideki 1997「明治期の女子書簡文における『参らせ候』の衰退――明治期女子用往来物を資料として」『語文』［大阪大学］67 号、33–42 頁。
小椋秀樹 1998「書簡文研究資料としての明治期往来物」『論究日本文学』［立命館大学日本文学会］69 号、38–55 頁。
岡村金太郎 Okamura Kintarō 編 1925；⑴ 1922『往来物分類目録』啓蒙会事務所。
Rüttermann, Markus 2003 “Ein japanischer Briefsteller aus dem ‘Tempel zu den hohen Bergen.’ Übersetzung und Kommentar einer Heian-zeitlichen Handschrift (sogenanntes *Kōzanjibon koōrai*). Erster Teil.” *Japonica Humboldtiana* 7, pp. 5–54.
Rüttermann, Markus 2004 “Ein japanischer Briefsteller aus dem ‘Tempel zu den hohen Bergen.’ Übersetzung und Kommentar einer Heian-zeitlichen Handschrift (sogenanntes *Kōzanjibon koōrai*). Zweiter und letzter Teil.” *Japonica Humboldtiana* 8, pp. 5–82.
Scharschmidt, Clemens 1917 *Unshū Shōsoku oder die Briefsammlung des Unshū von Fujiwara Akihira. Der älteste japanische Briefsteller (11. Jahrhundert n.Chr.)*, Buch 1–2. Berlin: Reichsdruckerei (Diss.). 或は *MSOA* (Abt. 1) 20, pp. 20–114.
Scharschmidt, Clemens 1918 “Unshū Shōsoku oder die Briefsammlung des Unshū von Fujiwara Akihira. Der älteste japanische Briefsteller (11. Jahrhundert n.Chr.), Buch 3–6.” *MSOA* (Abt. 1) 21, pp. 81–154.［40 通を除く部分訳］
田淵正雄 Tabuchi Masao 1997「『和漢書籍目録』の原刻本について」『ビブリア』［天理図書館報］107 号、79–99 頁。
植垣節也 Uegaki Setsuya 1962a「高野山西南院蔵『和泉往来』の原本の形態」『訓点語と訓点資料』23 号、19–23 頁。
植垣節也 1962b「『和泉往来』の原作者をめぐって」『訓点語と訓点資料』24 号、21–43 頁。
植垣節也 1965「“和泉往来の原作者” 再論」『訓点語と訓点資料』30 号、1–10 頁。

八鍬友広 Yakuwa Tomohiro 1987「一揆訴状の往来物化とその流布の教育史的意義――『白岩目安』を事例に」『日本の教育史学』30 号、24–41 頁。

山田英雄 Yamada Hideo 1968「書儀について」森博士還暦記念会編『対外関係と社会経済――森克巳博士還暦記念論文集』塙書房、29–44 頁。

山田忠雄 Yamada Tadao 1981「高野山西南院蔵和泉往来解説」『貴重古典籍叢書』第 3 巻（和泉往来高野山西南院蔵）、貴重古典籍叢書刊行会、1–12 頁。

## 2　史料

『文章指南調法記』*Bunshō shinan chōhōki* 2005（重宝記資料集成、第 7 巻、往来物 2）、臨川書店、5–254 頁。

*Chidu shuangyu* > *Sekitoku sōgyo*

『杜家立成雑書要略』*Dujia licheng zashu yaolüe* 1994（日中文化交流史研究会 Nitchū Bunka Kōryūshi Kenkyūkai 編『家立成雑書要略――注釈と研究』翰林書房に収）。

『敦煌表状箋啓書儀輯校』*Dunhuang biao zhuang jian qi shuyi jijiao* 1997（敦煌文獻分類録校叢刊 *Dunhuang wenxian fenlei lujiao congkan*）、趙和平 Zhao Heping 編、江蘇 Jiangsu：江蘇古籍出版社 Jiangsu Guji Chubanshe。

『長谷寺霊験記』*Hasedera reigenki* 1964（続群書類従、第 27 巻［下］）、続群書類従完成会、pp. 179–275。

『百也往来』*Hyakuya ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、講談社、441–51 頁。

『和泉往来』*Izumi ōrai* 1981a『和泉往来高野山西南院蔵』（貴重古典籍叢書、第 3 巻）、貴重古典籍刊行会。

『和泉往来』*Izumi ōrai* 1981b『和泉往来高野山西南院蔵』（京都大学国語国文資料叢書、第 28 巻）、佐竹昭広 Satake Akihiro 編、京都：臨川書店。

『和泉往来』*Izumi ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、石川謙 Ishikawa Ken／石川松太郎 Ishikawa Matsutarō 編、東京：講談社、220–34 頁。

『女用智恵鑑宝織』*Joyō chie kagami takaraori* 1994（往来物大系、第 94 巻に納められる）、大空社。

『慶長五年耶蘇会板倭漢朗詠集』*Keichō gonen Yasokai han Wakan rōeishū* 1964、京都大学文学部国語學国文學研究室 Kyōto Daigaku Bungakubu Kokugogaku Kokubungaku Kenkyūshitsu 編、京都大学文学會 Kyōto Daigaku Bungakukai、47–56 頁。

『麒麟抄』*Kirinshō* 1966（続群書類従、第 31 巻［下］）、続群書類従完成会、137–207 頁。

『高山寺本古往来』*Kōzanjibon koōrai* 1972、高山寺典籍文書綜合調査団 Kōzanji Tenseki Monjo Sōgō Chōsadan 編『高山寺本古往来・表白集』（高山寺資料叢書、第 2 巻）、東京大学出版会に収。

『萬物名數往来』*Manbutsu [or Banmotsu] meisū ōrai* 1978（日本教科書大系、往来編、第 6 巻）、108–14 頁。

『日本国見在書目録』*Nihonkoku genzaisho mokuroku* 1959（続群書類従、第 30 巻、続群書類従完成会に収）。

『令集解』*Ryō no shūge* 1966（国史大系、第 24 巻）、吉川弘文館。

『尺素往来』*Sekiso ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、483–514 頁。

『尺牘雙魚』／『尺牘双魚』*Sekitoku sōgyo*、*c. Chidu shuangyu* 1652（京都：中野市右衛門

Nakano Ichiemon)、京都大学付属図書館（登録番号 910002419–91002420、申請番号 4–04/se/1）。
『釈氏往来』*Shakushi ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、187–217 頁。
『新札往来』*Shinsatsu ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、462–82 頁。
『書札調法記』*Shosatsu chōhōki* 1976（近世文学資料類従、参考文献編、第 5 巻）、勉誠社。
『宇津保物語』*Utsuho monogatari* 1959、第 3 巻（日本古典文学大系、第 12 巻）、岩波書店。
『新編事文類聚翰墨全書』*Xinbian shiwen leiju hanmo quanshu* 1995a（四庫全書存目叢書 *Siku quanshu cunmu congshu*、子部 zibu、第 169 巻、臺南 Taiwan／Tainan：莊厳文化事業有限公司 Zhuangyan Wenhua Shiye Youxian Gongsi。同 1995b（四庫全書存目叢書、子部）、第 170 巻、1–392 頁。
『勇烈新田往来』*Yūretsu Nitta ōrai* 1996（稀覯往来物集成、第 7 巻）、大空社、73–104 頁。
『雑筆往来』*Zappitsu ōrai* 1967（日本教科書大系、往来編、第 2 巻）、423–40 頁。